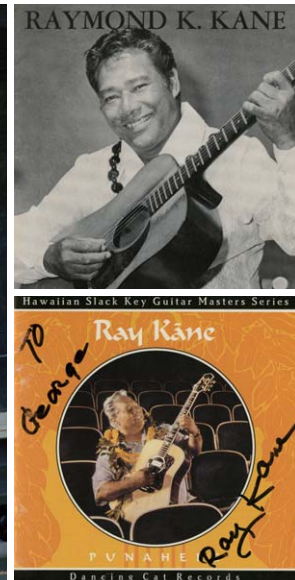


Music

レイモンド・カーネの『プナヘレ』とハワイのアロハスピリット

Text & Photos: George Cockle
文・写真/ジョージ・カックル



いつのことだっただろう？ 俺の頭にはまだ髪の毛があって、おなかも引っ込んでいた。まだロングボードを持っていなかったし、音楽プロデューサーという仕事をやっていた。まだ家族もいなかったから、生活は自由で楽だった。おっと、間違えないで、家族があることはすばらしいよ。また別の自由がある。でもその頃は本当に勝手に生きていた。みんなそんな時期はあるだろう？好きな仕事をして、好きなときに休みを取っていた頃。

音楽プロデューサーとして俺が手がけるアルバムのはほとんどはハワイアンとレゲエのミックスのジャマイカン。だけどもある企画で、ハワイのテレビCMの音に使う、オーセンティックなハワイアン音楽を見つけてくれという依頼があった。勢いで仕事を受けてしまったけど、そういう音楽はまったく知らない。ハワイでさまざまなギタリストに会ってオーディションもしてみたけど、なかなか見つからない。そんな時、あるスタジオのエンジニアが、いい人がいると教えてくれた。スラックキーギタリストのレジェンド、レイモンド・カーネさんだという。そこで俺は彼が住んでいたオアフ島西部のナナクリという町を訪れた。そこは観光客が

ほとんど行かないローカルタウン。家を見つけて車を止め、ゲートから入ろうと思ったら、背が低くて丸っこい体型のハワイアンのおじさんが笑いながら、俺に向かって叫んできた。「車に乗って帰りたいんだったら、庭に入れた方がいいよ。こちら辺の若者達は知らない車にはイタズラするよ、特にレンタカーにはね(笑)」

彼は最初からハグしてくるようなアロハのスピリットで、俺を受け入れてくれた。家に上がって、彼と奥さんのエロディアと話し始めると、仕事の内容を説明する前から笑顔でギターを取り出し、スラックキーギターのことを説明してくれた。そして彼は真剣な顔で、ギターを口にくわえてみてくれと言ってきた。俺はそれがジョークかどうかわからなかったので、ギターをくわえた。すると彼は弾き始めたんだ。ギターの振動が俺の歯を通して、俺は身体全体でスラックキーの音楽を感じた。そして仕事の内容を説明すると、彼はふたつ返事でOKをくれた。スタジオで2曲レコーディングし、仕事は無事に終わった。そのあと俺はスラックキーギターのことを調べ始めた。すると知れば知るほど、レイがどんな人かわかってきた。彼はハワイに住むスラックキーギタ

ーの最後の名人だった。それなのに、何も知らない俺に嫌な顔せず、全然偉そうな態度も取らなかった。それからというもの、ハワイに行くたびに彼に会いに行き、生のギターを聞かせてもらった。彼の家のリビングで聴いたあのスラックキーギターは一生忘れられない思い出だ。

でも気になることがふたつある。ひとつは最初の仕事で2曲をレコーディングした時、ハワイの曲を注文したのに一曲はパリの歌だったこと。ハワイ語を分からない俺へのジョークだったのかな？そしてもうひとつ。俺にギターをくわえろって言ったのも、ジョークだったのか？俺は最後まで、その答えを聞くことができなかった。

彼は2008年に亡くなった。たくさんアルバムは出さなかったけど、この一枚があればいいというぐらい『プナヘレ』はハワイの真のトラディショナルなアロハスピリットを感じさせてくれるものだ。



ジョージ・カックル ●60～70年代のロックに精通し、ラジオ・パーソナリティとしてインターFMや東京FMで活躍中。鎌倉出身・在住。波乗り歴38年の親父サーファー。
www.whatsupmusicinc.com